

多元文化

第 11 号

2021



早稻田大学多元文化学会

多元文化

Transcultural Studies

Vol.11

2021



2021

早稻田大学多元文化学会

Association for Transcultural Studies
Waseda University

編集後記

『多元文化』第十一号をお届けします。コロナ禍はすでに定着し、オンラインによる研究会、授業、会議などの方法が安定的に実施されるようになった反面、その問題点が浮き彫りになりました。

多元文化学会春期・秋期両大会は、前者においては国際日本学教育について海外から多彩な報告がなされました。また、後者では五つのゼミによる学生研究発表、一本の一般研究発表、そして文学部から多元文化論系に移られた渡邊義浩先生による講演が実施されました。吉原浩人先生を中心に人文研年次フォーラムが開催にこぎつけましたこととあわせて、これらはオンライン開催であったの実現であった部分が大きかったものと思います。

編集作業や会議の多くもオンラインにより進められ、両学会大会の内容を含め、春期大会特集、九本の論文など、充実の内容となりました。とはいえ、留学生の往来などへの支障も多く、コロナ禍への適応を喜んでばかりもいられません。仮想、現実の分断を乗り越える叡智が、いま、地球規模で求められています。

(伊川)

(表紙) コメルシオ広場 (2001年11月8日、伊川健二撮影)

ポルトガル・リスボン中心地の広場をサン・ジョルジェ城からのぞむ。テージョ川に沿った写真左端付近の開けた場所がその広場である。かつてここにリベイラ王宮 (Paço da Ribeira) が存在した。1584年8月に天正遣欧使節がリスボンに到着した時、ポルトガル王位はスペイン国王フェリペ2世が兼ねるところとなっており、この地にはポルトガル副王として枢機卿アルベルト・アウストリアが派遣されていた。アルベルトはリベイラ王宮で使節たちと謁見し、使節たちは犀角のコップを献上したといわれる。当時の王宮は三角に尖った屋根に特徴があり、神戸市立博物館蔵「四都図・世界図」のうち四都図 (リスボン) にも、画面中央付近に描かれている。

(裏表紙) 旧サント・アントン小学院 (2018年8月18日、伊川健二撮影)

現在のソッコロ教区教会。かつてモスクが存在した場所に、ドミニコ会の修道女たちが建物を見て、さらに彼女らの移転に際して施設をサント・アントン (Santo Antão) の隠者たちと交換したことが名前の由来となる。1542年にイエズス会の所有となり、ポルトガルにおける最初の学院となった。建物は後世の再建と考えられる。

天正遣欧使節はリスボン滞在時 (往路) にここを訪れている。ルイス・フロイス『九州三侯遣欧使節行記』によれば、訪問は学院長の招待によるもので、彼らは大いに歓迎され、要望を受けて、到着後和装に着替えたと伝えられる。

| | |
|---------------------------|-------------|
| 多元文化 第十一号 | 定価 1000円 |
| 令和四年二月二十八日 | 発行 |
| 編集者 | 『多元文化』編集委員会 |
| 代表 | 表 伊川 健二 |
| 発行者 | 早稲田大学多元文化学会 |
| 代表委員 | 井上 文則 |
| 発行所 | 早稲田大学多元文化学会 |
| 〒162-8644 東京都新宿区戸山一―124―1 | |
| 早稲田大学文化構想学部多元文化論系室内 | |
| 印刷所 | 株式会社 正文社 |